
輪

あさび

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪

【Nコード】

N9734W

【作者名】

あさび

【あらすじ】

時は平安時代。公家の姫、千と随身の翔景はお互いに想いを寄せていた。

そんな中、千姫と上層階級の青年の婚姻が決まる。嘆く二人は心中を決意する。生まれ変わり、必ず結ばれる日が訪れると信じて。それから千年の月日が流れ…。

（一応BLですが、絡みはかなりソフトになってます）

前編（前書き）

BL転生ものです。

閲覧頂きありがとうございます。勉強不足な点が多々ありますが
ご容赦下さいませ。それではしばしお付き合い下さい。

前編

時は平安時代中期。

築地で囲まれた一辺120メートルの敷地を持ち、東西に正門を開いた屋敷の中庭に、ひとりの姫がいた。小川の水が注ぎ入れられた豪勢な池を、長い黒髪と小袿を地面に垂らして覗き込んでいる。この姫、千姫は先程からずっと、こうして池をただじっと見つめていた。その瞳はどこか物憂げだ。千姫は公家の家の娘で、14歳。この間元服の儀式を済ませ、形式の上では、一応大人。そして千姫は数日前、上流階層の青年から結婚を申し込まれていた。

「…千姫」

前栽の影から現れたのは、褐衣姿の青年。千姫は、揺れる水面に視線を馳せたままにいる。

「姫、髪が汚れてしまう。どうかお立ちを」

青年が彼女のすぐ後ろまで近づき囁きかけても、姫は何も答えない。ただ、ぼんやりと水面を見ている。

「千姫？」

3度目の青年の声に、姫は重たい小袿姿をゆっくりと振り向かせた。

「翔景…様」

ぼとぼと、千姫の瞳から涙が流れていた。次々溢れる雫はまるで、雨のように。

「私、どうしたらいいのでしょうか！」

「姫…」

「翔景様と離れるのは…嫌です！」

千姫が涙ながらに叫んだ。青年、翔景は悲しげに瞳を伏せる。二

人は言葉無くただ水面を見つめる……ふいに、姫が青年の胸に飛び込んだ。

ぐすつ…と青年の胸に涙の瞳を埋める。普段気丈にしても、本来はか細い少女でしかない幼い姫を、青年はそつと抱きしめた。もうすぐ貴族の男性のもとへ嫁に行ってしまうこの幼い姫を、繋ぎとめる力が自分にあれば。随身の職につく翔景は、貴族に勝るほどの権力も財産も持たぬことなど、とうに知っている。

しかし、どうにかしてこの少女を守りたい。青年は、そんなことを思っていた。

「千姫…例えば身体は離れていようと、貴女が私のことを想っている限り、私の心は貴女と共にある。だから、千姫…」

翔景の言葉に、千姫は泉のように涙を湛えたその瞳を上げ、
「そんなの…嘘！肉体が離れた時、心もまた、離れるのです。もう死んだ母様と二度と会えないのと、同じです…」

と、言った。言葉の最後は、青年にも聞き取れぬ程の小さな声で。悲痛に泣き続ける姫を、青年は戦士が邪悪な物の怪から愛する者を護るかのように、強く抱擁した。

一月前のことである。

元服の儀式を終えたばかりの千姫に、歌合わせの催しに訪れていた貴族の青年が目留めた。千姫は、絹糸のように繊細な美しい黒髪を持ち主で、何より髪的美しさを重んじた平安の男性達に評判が良かったのである。この青年、名は清隆といい、文武に長けたなかなかの美男子だった。

歌会の数日後、清隆はさつそく千姫に求婚の文を出す。千姫は戸惑うが、義母はたいそう喜び、姫に返しごとの文を送るよう勧めた。こうして千姫の結婚の話は本人の気持ちを置き去りにたちまち進んでいき、ついには清隆が屋敷に通されるところまで進んで行く。

…平安時代の結婚までの過程は実にまだるっこしいもので、まず

男性が意中の女性に求婚の文を送り、女性からの返事の文（返しごと）を待つ。そのあとしばらくの間は恋の歌の文の交換が続く、女性からの内報で男性はようやく、女性の家を訪ねることが許されるが、この時点ではすのこまでの侵入しか許されず、男性は女房を通じ女性と歌を贈答し、朝には帰って行く。さらにそれらの回を重ねる事でついに、屋敷に入る事を許されるのだ。そうなるあとは短い。二人が結ばれた直後に男性が送る「後朝の文」と両親の合意で正式な結婚が決まる。

と、これは貴族の間では常識であり、千姫も何度もそう聞かされていた。だから自分がもうすぐ嫁に行く事になるのだという事は理解していた。きっとこの結婚は避けられない。家の為にも、喜んでくれた義母の為に。

文を交わし、数回顔を合わせた限りでは、相手の男性は上品で歌も上手く、自分には勿体ないくらい的好青年だった。同じ年頃の姫の中には、自分と倍近く歳の離れた父親のような男性と婚儀をあげた子もいるのだから、これはとても幸運な事と言える。

でも、千姫は憂鬱だった。本当ならこんな結婚はやめにしてしまいたかった。千姫は想い人の名をひっそりと呟いた。

翔景様。

彼、翔景は千姫の家を代々護る随身の家の生まれ。弓が得意で、千姫の父からも篤く信頼されている、隨身として有望な若者である。千姫とは姫がほんの子供の頃から一緒だった。いつも姫の事を案じ、危険から護ってきた翔景。

千姫は、いつしか翔景を一人の男性として愛するようになっていた。翔景もまた、身分違いの姫を愛していた。想いが通じ、二人はしばし幸せな時間を過ごす。

しかしその幸せは長くは続かなかった。婚儀が行われたら、二人はもう逢うことも許されなくなる。

それはつまり、この恋の終わりを意味していた……

「…輪廻転生」

「へっ？」

翔景が、千姫を抱きしめたまま呟いた。唐突だったので、千姫は思わず間抜けな声を出す。

「仏様の教えでは、人は、死んだらまた違う人間に生まれ変わると」
「は、はい」

「なら、千姫…私と一緒に、」

死んでくれますか。

翔景ははつきりと言った。千姫は驚いて翔景を見上げる。

「本当は私とて貴女を他の男になど渡したくない。しかし仕方がないと思っていた。身分が違うのだからと…しかし、貴女が私と共に願うのなら、どうか」

「翔景様…」

「仏様のおっしゃる事が事実ならば、きっと来世でまた出会える。今生で結ばれる事は敵わずとも、転生した世では、必ず」

千姫は黙って翔景の言葉を聞いていた。転生した世。そこに少女は一筋の希望の光を見た気がした。死ぬ、という言葉に、いまひとつ現実感がないけれど。翔景を信じよう、と思った。

「…わかりました」

「…千姫」

「貴方と共に死ぬのならば、それもまた、本望。どうか私を、その手で、葬って下さいませ…！」

少女は青年の腕から離れると、両眼を閉じた。

その意思を察し、翔景は懷から短刀を取り出した。音もなく剣を抜く。短刀の気配に姫はごくり、と唾をのんだ。しかし身動きひと

つすることは無い。この運命を受け入れる。そう覚悟したように。短刀が幼い姫の胸をひと突きする。千姫は短くうめき声をあげ、翔景の胸の中に倒れ込んだ。

「愛して、おります。翔…景、様…」

「…私もです、千姫」

姫の頬から涙が伝った。抱きしめる翔景もまた、泣いていた。

「……」

千姫の心に、ひどく寂しいような、懐かしいような気持ちがいっぱい。これは別れ。しかし、新たな始まりでもある。

翔景は千姫をそつと地に横たえた後、自らの腹に短刀を突き立てた。そして翔景もその場にくず折れる。

「…どの世に生まれ変わっても必ず、捜し当てる。千姫、どうか、私を信じて…」

朦朧とした意識の中。翔景の声がひどく遠くのように聞こえてくる。鉛のように重い指を、どうにか動かしその指に触れた。意識が混沌に飲み込まれる。

千姫は、その瞳を、閉じた……

それから千年近くの月日が流れた。

都内の住宅街。住宅が群生する町の一角に、サーモンピンクの塗装で塗られたその学生寮があった。

メゾン鬼灯。近隣の大学や専門学校に通う、親元を離れ上京してきた若者の為の学生寮である。

四階の三号室から、二人の青年が出てきた。

「おい、いくらなんでも早過ぎないか。まだ七時になったばかりだぞ」

「いいんですよ。あ、ちょっと、ゴミ持ちましたか」

「持ったぞ…全く、何度聞けば気が済むんだお前は」

ばたばたと、二人はエレベーターに乗り込んだ。ゴミ袋を抱えた方の青年が、通学鞆とゴミで塞がった両手で、苦勞しつつ一階のボタンを押す。もう一人の方は片手に持った単語帳に視線を走らせている。ゴミを持った方が「おい」とルームメイトの青年を睨みつけた。

「比呂、お前…人にゴミを持たせて自分は試験勉強か」

「ああ、今日試験なもので」

「俺も試験だぞ」

「すいません。でも先週は僕がゴミ出ししたんだし、これで平等ですよ」

青年、比呂はしれつと言った。

「くう…」

エレベーターの点滅ボタンが一階を示し、自動の扉が開いた。単語帳を持ったまま、比呂が足早に出ていく。

「何ぼんやりしてるんですか。先に行きますよ」

「いやゴミ重いんだが！鞆もあるからかさばるし…」

ずるずるとアスファルトにゴミを擦り付けながら講義するが、先を歩く比呂が止まる気配は無かった。

「クソ…なんで俺はあんなやつ親友をやってるんだ」

比呂とルームメイトの二人は都内の大学二年生だ。今日は日本語のテストが一限目にあるので、こうしていつもより早く寮を出ている。途中でルームメイトが指定のゴミ捨て場にゴミを出した後、最寄りの駅からいつもどおり地下鉄に乗り込んだ。

電車は普段よりやや空いていたが、それでも座席から溢れて通路に立っている人の姿がまばらに見られる。比呂達もそれに倣い、出口近くに並んで立った。

比呂が単語帳を鞆にしまい、電車内をキョロキョロと見回した。それを見兼ねたルームメイトが、

「おい比呂。お前怪しいぞ。いい加減諦めたらどうだ。どう考えたって前世の恋人なんて…」

彼の制止をもっともせず、比呂が辺りを見回しながら言う。

「余計なお世話です」

「…冗談のひとつも言わないようなお前が、前世の恋人を探している、か。意外とロマンチストなんだな、お前」

「別に信じてくれなくても結構ですよ。でもこれはまぎれもない事実なんです。僕ははっきりと覚えていますよ。過去の僕は翔景という名の随身で…」

「千という名の姫と心中した、だろう。全く、小説の読みすぎじゃないのか…」

ルームメイトが呆れて言った。

「うるさいですよ。いいから放っておいてください」

これ以上は藪蛇だと思い、彼は口をつぐんだ。それきり二人はなんともしないに押し黙る。静かな車内で電車が目的地に到着するのを待つ。駅内アナウンスが、聞き慣れた駅の名前を次々告げていく。

誰もがつまらない顔をしている、普段どおりの東京の朝だ。

テストが終了し、宮澤比呂は一人、ざわめきが溢れる廊下を歩いていた。

彼には前世の記憶があった。彼はものごころついた頃からすでに確信していたのだ。自らの過去を。もし自分があのルームメイトと同じ立場だったら、同じように馬鹿馬鹿しい、と思うだろう。しかし、この確かな記憶は幻なんかじゃない。

だから比呂は記憶の中の千姫の面影を、この現代社会で探していた。ずっと。自分と同じように彼女もまた、翔景の生まれ変わりを探しているはず。

千姫、一体、どこに。

なかなか見つからない前世の恋人に、比呂は歯痒い思いをしてい

た。いや、きつと見つかる。現に自分はこうして転生しているのだから。比呂は自分にそう言い聞かせ、再び、千年の月日を越えてなお強く恋い焦がれる姫の姿に想いを馳せる。

あどけない表情。長い睫毛。嘘みたいに綺麗な、黒髪。

その時窓の外を眺めていた瞳の端に、千姫のそれに似た夜の闇のような色が、ちらりと映った気がした。

大学の隣は中学のグラウンドになっている。今もきやあきやあと中学生が騒ぐ声が聞こえていて、ルームメイトなんかは、「この学校の最大の弱点だ」と腹を立てていた。

「まさか…」

半信半疑で比呂は階段を下り、校舎を出た。中学校のグラウンドがフェンス越しに見える場所に移動する。

グラウンドでは中学生達が秋風の中、半袖半ズボンでテニスをしている。その中でも、中央のコートで行われている試合が盛り上がっているようで、生徒達の視線を集めていた。点数が入る度、歓声がここまで届く。比呂もつられてそちらを見ると、なるほど、中央のコートの二人はなかなかできるようだった。激しい打ち合いが続き、ふいに、ボールが高く舞い上がり中学生の遙か上空を通り過ぎていく。ボールはフェンスを越え、比呂の真横へ着地した。

「あ…！」

中央のコートでプレイしていた男子中学生がしまった、という感じで声をあげた。

「あ、あああのすいません！ボール、取ってくれませんか！？」

その男子生徒が叫んだ。一方比呂はボールを拾い、投げ入れようとコートを振り返り…身体を静止させた。

「……」

中学生と視線が絡む。

長い黒髪。そして絶対に見間違っことのない、千姫の面影。
まさか。

「あ、あの…？」

ボールを持ったままぴくりとも動かない大学生を不審に思い、少年が近付いてきた。

「あ、あの、すみません」

「あ…ああ」

我に帰った比呂は、ボールをフェンスの向こうへ投げ入れた。中学生は礼を言ってコートに戻って行く。

「千…姫…！」

まさかこんなに近くにいたなんて…。やっと、やっと見つけた。

比呂はしばらくグラウンドから吹き込む砂埃の中、立ち尽くしていた。

前編（後書き）

お疲れ様でした。少しでも気に入っていただけたらこんなに嬉しいことはありません。後編に続きますのでよろしかったらそちらもお付き合い下さいませ。

後編（前書き）

舞台は現代日本。翔景の生まれ変わり、比呂は、同じく転生して
いるはずの千姫を探していた。

ある時、比呂は偶然にも千姫の生まれ変わりとされる少年、柊
と出会う。しかし、柊には過去の記憶が無かった……

後編

「見つけただとお!？」

「はい」

素っ頓狂な声をあげるルームメイトに、比呂が真顔で答えた。

「それで、どんな奴なんだ。美人なのか」

ルームメイトはよもや突っ込みをすることを諦めているようだ。

「一応、適当に」という感じで尋ねた。

「隣の中学校の生徒です」

「中学生!」

いや待てお前それ若干犯罪の臭いがするぞ、と早口にまくし立てる。

「人の事をあまりとやかく言いたくはないが…っておい。比呂、お前どこに行くんだ。駅はこっちだろう」

大学の門を出て、いつもと反対側に曲がろうとする比呂に、ルームメイトは今度こそ突っ込みを入れた。

「ああ」比呂は何でもない顔で言った。

「だから中学校に寄って行くんですよ。言いませんでしたか」

「…言つてない!!」

「そうでしたか。すいません。さ、貴方も一緒に来て下さいよ」

と、比呂が、ルームメイトの中途半端に伸ばした髪を引っ張る。

「こらやめろ!抜ける!」とルームメイトが抗議の声をあげる。

「だいたい、今日び部外者がそう簡単に入れると思っっているのか。不審者と思われて追いつ返されるのがオチだぞ!」

「大丈夫」

「何が大丈夫なんだ!？」

中学校は下校時刻を迎えていて、寂れた灰色の校舎から、次々と生徒達が出てくるところだった。案の定、中学生達の不審そうな視線が二人を射る。このくらいの世代が何となく苦手なルームメイトが所在なげにしていると、比呂は早速目的の人物を見つけたらしい。ルームメイトを置いてその人物へと歩み寄る。

それは男子の三人グループで、どこにでもいる元気な男子中学生という感じだ。そのうちの一人が、こちらに近付いてくる大学生の姿に気付いて歩を止めた。長い黒髪に幼さを残した容姿。

「あ、あなたはさっきの…」

少年の方が先に口を開いた。比呂が黙って見つめ返すので、自然と見つめあう形になる。しばらくして気まずくなった少年が、

「さ、さっきはどうも…。それじゃ」

と身を翻した。比呂がその腕を掴む。

「待って下さい、千姫」

「…え？」 少年が目をまるくした。「覚えていませんか。僕です、翔景です」

「……」

ばっ、と少年は比呂の手を振りほどく。

「あの…何だかわかりませんが、人違いじゃないですか」

言って少年は足早に比呂から離れ友人と合流する。

「誰？今の」「知らない奴。行こ」「おう」

その姿はあっという間に小さくなっていき、曲がり角の向こうに消えた。

「あれが、運命の姫の生まれ変わりか」

ルームメイトが、呆然とする比呂に近付いてきてぽつりと言った。

「ええ…。記憶が、無いようでしたか」

「というか今の男じゃないか!？」

「そのようですね」

「そのようですねってお前…」 ルームメイトが呆れ返ってため息をついた。

「とにかく、今日は帰らないか。明日も試験だろう」

「いえ、先に帰っていて下さい。僕はあとから帰りますから」

「まさか、追い掛ける気か!？やめとけ!お前、それはいくらなんでもまずいぞ」

「でも行かなくては。約束しましたから」

それだけ言々と比呂は、先程少年達が消えた曲がり角へと物凄いスピードで消えていった。

「…また、あなたですか」

友人達と別れ、一人路地裏を歩いていた少年に、再び比呂は声をかけていた。少年はいよいよ訝しげな顔になる。

「一体、何の用ですか…?」

「…いえ、ただ、貴方が死んだ恋人に似ていたもので」 嘘ではない。少年は一瞬その大きな瞳を曇らせたが、すぐに警戒をあらわにした顔になり、

「でも、俺はその恋人とは別人です。だいたい、お、女じゃないし。用がそれだけなら、もう俺につきまとうのは止めてください」

比呂は千年来の恋人と向き合っている懐かしさと、気持ちを通じない焦り、それらのとりとめのない感情を抱いていた。でももう、紡ぐ言葉のひとつも思い付かない自分がある。そのもどかしさ。

「こう見えても俺、忙しいんです。あなただってそうでしょう。見たところ、大学生みたいだし」

少年が気丈に、生意気そうに言った。そこに、比呂はこの年頃特有の焦燥感を感じた。十四歳なのに大人と呼ばれ、無理してそれらしく振る舞っていた、あの少女と似た何か。

「…何をそんなに恐れているんです」

「は？」

「貴方は、目に見えない何かと戦っている。一人きりで。大人のふりをして、世の中を渡り歩いて行かなくてはと思っている。違いますか」

「…あなたに…」

悔しげに、そして憎々しげに少年が言った。

「あなたに、何がわかるっていうんだ!!」

吐くように言い放ち、少年は比呂に背を向け、走り去って行った。

「あ…」

怒らせてしまったようだ。比呂は反省して頭を掻いた。さすがに唐突過ぎたか。あれでは警戒されるのも当然かもしれない。

ふと、アスファルトの上にダークブルーの携帯電話が、ぽつんと残されているのが目に入る。

「あれ…これは」

比呂はしゃがんでそれを拾い上げた。これは、恐らく少年の落とし物だろう。よりによって携帯電話を落とすとは、少々間抜けだ。軽い罪悪感を抱きつつ、比呂は携帯電話を開く。オーナー登録の画面を確認する。

白水 柊

それが少年の名前らしい。少し変わった名前だ。律儀に入力されていた住所によると、彼の家はここからそう遠くない。寮の帰り道にある、高層マンションだ。

比呂は逡巡の後、やはり携帯電話を届けに高層マンションに向かう事にした。

…きつと嫌われるだろうが。 ピンポーン

比呂は、高層マンションのインターフォンを押した。しばらく待つが、何の反応も無い。留守だろうか。念の為もう一回押してみる。反応無し。扉の前に人の気配がないのを確認し、比呂は仕方なく踵を返した。

「…あ！」

振り返った先に、先程の中学生、白水柊。比呂の姿を視界に捕らえ、柊が驚きの声をあげた。その顔はすぐに「またか」と言いたげな、嫌悪感のあきらかな表情に変わる。

「どうして、家…」

警戒する柊に、比呂は秋物のコートのポケットから、ダークブルーの携帯電話を取り出し、渡す。

「携帯、落としたでしょう」

「え！ほ、ほんとだ…。あ、すみません、わざわざ」

携帯電話を受け取るその腕には、スーパーの袋がかけられている。スケルトンの袋の中には大根。それにみょうがに醤油のボトル。スーパーに寄ってたから遅かったのか…と比呂は思った。

そして、

「それでは僕は帰ります」

あっさり帰っていく青年の後ろ姿を、黙って、ちよつと意外そうに柊は見ていた。

「へんなやつ…」

ぼそりと呟いたその言葉が、秋風に乗って比呂の耳に届く。

運命が味方している限り、きっと、また、会える。比呂はそう信じている。

街頭に薄く照らされているアスファルトを歩いている間、ずっと彼…柊の事を考えていた。

全然、変わっていない。彼の魂は千姫のままだ。今の比呂には、その事実だけで充分だった。

その日の夜。

比呂はわざわざ豆を挽いて、コーヒーを飲んでいた。勿論ストリート。コーヒー通の比呂にしてみれば、コーヒーに砂糖やらミルクやら入れて飲む人の気がしれない。

ついでにルームメイトのぶんも煎れてやったので、彼も比呂の隣に腰掛けコーヒーを飲んでいる。彼は甘いのが極端に苦手な為、同じくブラックだ。

どちらが見ているでもないのだが、テレビはバラエティー番組を流している。時折、誰かが面白い事を言っては、他の出演者の笑いを誘っていた。

「おい…」

ルームメイトが、大半を飲み干したコーヒーを一旦テーブルに置いて、言った。比呂はコーヒーカップに口をつけたまま、

「…何ですか。テスト勉強の質問なら休憩の後にして下さいよ」

「いや、そうじゃないんだ。…実は、俺の恋人についての相談なんだが」

「はあ」

比呂は頷いた。

ルームメイトのこういった相談は、わりとしょっちゅうの事である。

彼の恋人は比呂達より三つ年下の高校二年生。相談の内容は、その恋人があまりにもニブイので恋愛が進展しない、というのがたい。今日の相談も、やっぱりそういう話らしい。

ルームメイトはコーヒーカップを両手で包むようにして、「やはり、男としてはだな…」と、とつとつと語り出した。

「愛し合っているのなら、それを何らかの形で表す事が必要だと思うんだ」

「つまり、欲求不満なんですか」

「よ…！？何でそうなるんだ！」

「違うんですか」

「違う！…そうじゃなくてせめて抱きしめあうとか、そういう愛情

表現が、だな」

「…そういう肉体的コミュニケーションがないと不安になると？」

「むぐ!？」と、ルームメイトが変なむせ方をした。

「お前、いちいちおかしいな表現をするな！」

「…じゃあ、聞きますけど」

比呂が居住まいを正して言う。

「貴方にとって、愛とは何ですか。…五十字以内で答えなさい」

「はあ!？五十字…？」

ルームメイトは「む…。いや。しかし…」やら言いつつも、何故か真剣に考えはじめる。

「で、どうなんです」

「…そうだな。誰かのことが無性に愛しいと思ったり、一緒にいたいと思うこと…その愛しい相手に触れたい、と思うこと、かな…」

真面目くさった顔をして言ったルームメイトに対し、比呂はきっぱりと、

「それはつまり、生殖本能に基づく妄想、他人に対する所有欲、ということですか」

「だからなんでそうなるんだ！」

「いえ。そう聞こえたので」

ルームメイトがごほん、と咳ばらいをした。いっきに残りのコーヒーを飲み干す。そして、空になったコーヒーカップを洗い場に戻した。比呂の方に向き直って、

「なら、お前はどう思うんだ」

と聞いた。

「…さあ」

「あのなあ！」

「自分で過程出来なかったから、聞いたんですよ。でも強いて言うなら…その人の存在そのものが自分を励まし、生かしていると思う、そんな特別だと思える人が現れた時その人を守りきろうとする心、ですかね。そう、この世のありとあらゆる悪から」

「悪……」

「ええ。つまり生きていく上で人が必ずぶちあたる敵、ですね。それは自分一人ではどうにもならない敵ですが、その敵から大切な人を一人、守るくらいの力が僕達にはあるんだと思うんです」

ルームメイトは、こいつは時々突拍子も無い事を言い出すなあという顔で比呂を見ていた。

そのうち、比呂も手の中のコーヒーを全部飲み干して、「さてそろそろ勉強に戻りましょうか」とソファアを立った。BGMがわりになっていたバラエティー番組もいつの間にか終わっていた。

「そつだな……」

ルームメイトも頷いて、またソファアに座り直しB5の大学ノートを開いた。

愛とは……

所有欲。

庇護欲。

わからないが、翌日のテストに関係無い事は確かそうなので、ひとまず二人は忘れる事にした。

「へくしょ！」

数日後、大学からの帰り道。10月も半ばで、少し前に比べ大分涼しくなってきた。完全に、秋の到来だ。この季節は、時間の流れ

が非常にはやく感じる。あつという間に色づく木々達を横目に、むず痒い鼻を押さえながら、比呂が、路地裏にある公園を歩いていた。都会の風景を一部切り取って、緑をはめ込んだような、木々の溢れる公園。都会に住んでいると、どうして人は緑が恋しくなるのだろう。それは人が地球上に生まれた一生物である事を証明するかのようだ。都会のビルの間にも、こうしてぽつりぽつりと公園が存在していた。

「ん？あれは…」

何メートルか先の、街路樹の影。吸い寄せられるように、比呂はその影に近付いていく。

心のどこかで予感していたとおり、その木の根本に、あの少年が学校帰りらしい詰め襟姿のままで、しゃがみ込んでいた。比呂は、遠慮がちに彼に近づく。声をかけるか、しばし躊躇う。こうして偶然会えたことは嬉しいが、不用意に声をかけて警戒されたくない。

だが、その考えは瞬時に頭から吹き飛ぶ。少年は泣いているようだった。その瞳から一粒、また一粒と透明な雫が流れている。

「…こんにちは」

比呂が遠慮がちに声をかける。

「…わあ!？」

不意を突かれた、というように、比呂の出現に少年は大袈裟なくらい驚いた。そして慌てて、まくしたてるように、

「や、ちが、違うんです!!これはあの…そ、そう俺花粉症がひど

くって！」

と言つて、ごしごし、と瞳を拭う。

必死の様子少年に、比呂は「僕には泣いていたように見えましたが」と寧ろ淡々と言つた。少年はうなだれる。

「……あんたつて、ほんとに嫌なやつだ」

その言葉に、比呂は心外だ、と肩を竦める。

「この前も、帰り道つけてきたと思つたらなんか失礼なこと言つてくし。よっぽど暇なんですね、えっと……」

「比呂です」

「比呂、さん？……なんかフツウの名前。似合わねえ」

虎之助とか又吉とかそういう古風な名前かと思つた、と少年が言う。今時そんな名前の奴いないと、比呂は内心突っ込んだ。

「貴方は柊さん、でしたよね」

「ん？……あ、ああ。携帯見たのか。びつくりしたなあもう。あんたストーリーっぽいから、電話帳とかで調べたのかと思つた」

「……で。柊さんは自分で夕飯を作ってるんですか」

柊は意表を突かれて一瞬不思議そうな顔になる。こくん、と一度頷いた。

「そ、うちは母さんがいないから。姉が一人いるけど、姉さんは大受験で忙しいし……だから家事全般が俺の担当」

「中学生だつて忙しいじゃないですか。部活とか」

「部活はやってない。……それに、家事はもう慣れたよ」

柊が、何気ない動作でくすんだ青灰色の空を見上げる。……にわか雨が降りそうだ。

「……でも、無理しているように見えましたよ。今だつて、泣いていたし」

と、比呂。柊は大きくかぶりを振つた。

「無理なんてしてませんっ。あれはただ、東京に越してきたばかりで色々不安だっただけで……」

「やっぱり、泣いてたんじゃないですか」

「う…！」

わかりやすい。柊は言葉を濁らせ、怨みがましい目で比呂を見ている。

「…柊さん、わくら葉って知ってますか」

突如、比呂が言った。柊は目を丸くする。

「はあ？何？」

「わくら葉とは、夏から秋の初めにかけて、街路樹などの赤や黄色づいた葉が、枯れて落ちる現象。古い葉が、自ら落ちる事で残った葉や、来年の春に新しく出てくる葉を助けているんです。その姿は、古くから人々の心に深い感銘を呼んでいました。過去の有名な詩人もこう詠んでいます。『わくら葉の 辛抱強くは なかりけりとね』

「……」

柊は、俯いている。その表情は読み取れない。

ぽつ、

ぽつ…

砂利道の上に黒い染みが点々と増えていく。比呂は「降ってきたね」と持っていた傘を柊に差し出した。自分は、鞆からミニタオルを取り出し頭に乗せる。

「あ、どうも…」

「柊さん。貴方は…」

「ん？」

「貴方はこの舞い降りる葉のような人です。昔もそうだった。本当

の自分を偽って、大人のふりをして精一杯、まわりを安心させようとしている。僕はせめて、そんな貴方の支えになりたいと思っていた。だから、辛い時は側にいて、力になりたい。貴方が自分自身を確かめられる唯一の場所に、なりたいんです……」

柊は、黙って比呂の瞳を見つめた。

はつとして、目を大きく見開く。傘を持つ手が、小刻みに震えている。寒さのせいではない。多分。柊がその口を開いた。

「……翔景、様……？」

「私は、貴方が貴方自身でいられる場所に、なりたい。世間の目から、あらゆる悲しみから、守りたいのだ」

ずいぶん昔。幼い頃から自分を護っていた青年が言った。自分の中で、凍り付いていた魂みたいなものが、ふ、と救われた気がした。この気持ちを柊は知っている。柊の脳裏に、つぎはぎの映画のフィルムみたいな、断片的な映像がちかちかと浮かび上がる。

「……柊さん？」

比呂が柊を心配そうに見守っている。柊の手からかつん、と傘が落ちて音を立てる。

「思い……だした……」

柊は絶望的な顔になる。

「でも、駄目だ……俺はもう、千姫なんかじゃない。……ごめんなさい」走り出す。その背はどんどん小さくなっていく。傘だけが比呂の

足元に残される。

「…柊さん！」

比呂も、慌てて走り出す。追いかけては、と漠然と思った。しかし柊は足がはやく、インテリな比呂は見失わないようついでいくのがやっとだ。比呂は必死で走る。二人の距離が少しずつ開いていく。追いつけない。そう比呂が思った時、柊が足を止めた。

「…比呂さんは、それでいいんですか。俺はもう千姫じゃない、全然違う人生を送ってきたただの中学生。それに俺は、お、男なんですよ！？再会をただだけ願ひ、ありえないくらいの偶然でまた出会えたからって、これじゃあ無意味じゃないですか！！」

「それは違います」

「違います！もしここで俺達が結ばれたとしても、いずれきつとあなたは他の女性が恋しくなる。俺だって、きつとそうだ。だってそれが普通でしょう！？だから、もう俺達は会わない方がいいんです！」

「それでも、僕は貴方が好きです。あなただけをずっと、探していた…」

「……」

「僕を、信じてはくれませんか」

柊は、黙っている。比呂はその腕を無理矢理引き寄せた。

「柊さん、聞いてください！」

柊の細身の身体を、比呂は自分の胸に引き寄せて、きゅっと抱きしめる。

いつかのように。

「僕は貴方を、愛しています。その気持ちは例え貴方が、どんな姿をしていたって変わりません。…だからせめて、貴方の側にいさせてください」

「比呂さん…」

柊は、しばらく比呂の腕の中でじっとしていた。そしてため息をつく。

「…比呂さんは全然変わらないな。馬鹿正直で、まっすぐで…すっげー物好き」

柊が薄く微笑んで言った。その髪と衣服が、雨に少し濡れている。比呂は慈しむような、優しげな笑みを浮かべた。そしてその手を柊の頭にまわし、漆黒の美しい髪に、触れた。

「それはお互い様でしょう」

千年ぶりの再会。以前と同じようにはいかなかったかもしれない。二人はもう、前とは違う人間だから。

でも、以前と変わらない、繊細で壊れやすい貴方を護っていきたい、と比呂は思った。

愛しています、千姫。

秋の小雨に小刻みに震える少年を胸に、比呂は心の中でそっと、
呟いていた。

後編（後書き）

お疲れ様でした。いかかだったでしょうか。拙いお話ではありますが、あなたに少しでも気に入っていただけたら幸いです。
ご意見、ご指摘などございましたらお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734w/>

輪

2011年9月24日03時20分発行